

芦田川流域における 古墳の地域的理解のために（その1）

古墳研究部会

1、はじめに

備陽史探訪の会古墳研究部会では、神辺平野を中心として、芦田川流域の古墳群の調査を継続して続けている。

いうまでもなく、神辺平野を中心とするこの地域は、前期古墳から「終末期古墳」にいたるまで、数多くの古墳の築造が認められ、備後地域南部に目を広げてみても、有数の古墳集中地域である。地形的にも芦田川の流域として、まとまりのあることから、個々の古墳・古墳群の検討を通じて地域史をとらえるに際して、質的にも量的にも興味深い地域といえる。

しかしながら、分布調査はもとより、発掘調査などから、個々の具体像を知ることができる古墳・古墳群は比較的少ない。そこで、私たちが分布調査や墳丘測量などをおこなっているのも、ひとつには、そうした基礎的な資料の蓄積の一助となることを目的としている。

今回、福山市加茂町下加茂所在の合の坪古墳（正福寺裏山二号墳）の墳丘測量をおこない、その結果について報告した。資料としての個々の

古墳の内容もさることながら、こうした資料を地域史のなかでどのよう
に位置づけてゆくかについて、古墳研究部会での意見交換をもとに、地
域史把握の一視点を以下に提示してみたい。

2、小地域の設定（地域の平面的把握）

古墳の分布を地図上においてゆくと、平野を見下ろす山頂から稜線
にかけて数多くの古墳の存在が認められる。それらの古墳のなかには、
もちろん、さまざまな年代のものが含まれており、一様に理解すること
はできない。

そこで、それらの古墳のなかでも数の多い、古墳時代後期の群集墳の
分布をみると、東から順に、

- I、神辺町上御領・下御領を中心とするもの
- II、同 東中条・西中条を中心とするもの
- III、福山市加茂町栗根・芦原を中心とするもの
- IV、同 駅家町新山・法成寺を中心とするもの
- V、同 同 服部を中心とするもの

Ⅵ、新市町中戸手を中心とするものなどがあげられる。

地域の動向をとらえるのには、こうした後期群集墳を指標として小地域を設定することが第一段階といえよう。なぜならば、古墳時代後期における爆発的な古墳築造の背景には、(A)築造を可能にする生産力の発展を基礎とする、内的要素と、(B)自らも古墳を築造するにいたる人々の存在という、対外的要素とがあると思われるからである。

逆にいえば、後期古墳を有する小地域を、地域史の最小単位と考えたのである。

3、小地域の動向（地域の時間的把握）

第二段階として、竪穴式石室を代表とする前期古墳の築造と、それらに引き続いての古墳の築造が、それらの小地域とどのように結び付けられるか、という視点がある。

芦田川流域の前期古墳としては、新市町の潮崎山古墳、福山市加茂町の石槌山古墳群、同じく駅家町の掛迫六号墳（及びその周辺）などがその内容をうかがうことのできる古墳である。これらに加えて、福山市加茂町の妙言池古墳群、そして、合の坪古墳を含めた正福寺裏山古墳群が知られるにとどまる。

また、後期古墳でも、大型の墳丘・石室などをもち、独立した存在であるものをみると、神辺町の大坊古墳、福山市駅家町の二子塚古墳、宝塚古墳、山の神古墳、二塚古墳などがあげられる。

これらを、先に設定した小地域と地理的な位置関係をもとにみなおすと、(Ⅱ)の小地域に含まれる大坊古墳、(Ⅲ)の小地域に含まれる妙言池古墳群、(Ⅳ)の小地域に含まれる二子塚古墳など、が指摘できる。

ところが、前期古墳については、その数の少なさに示されるように、直接に個々の小地域と結び付けることは難しい。もちろん、そこに前期古墳の特徴が表れているのであり、巨視的な地域の把握が求められるのと同時に、副葬品をつうじて、個々の古墳の特色を見極めてゆく作業が必要となる。

4、個別資料の検討

ここまでの段階で、地域史の動向を知るための基礎的な枠組みができあがったのであり、個々の古墳の検討も、こうした小地域の動向を裏付ける、もしくは、小地域の設定を見直す方向でおこなわれるべきである。合の坪古墳を含む福山市加茂町下加茂の地域は、(Ⅲ)の小地域付近にあり、掛迫六号墳を代表として、前期古墳が集中的に築造されている。したがって、(Ⅲ)の小地域との関係とともに、芦田川水系である加茂川流域の動向としても、注目される地域である。

ところで、古墳を資料として見る場合には、次の要素に着目できる。

- 一、立地・墳形
- 二、外部施設（葺石・埴輪など）
- 三、内部施設（埋葬施設など）
- 四、副葬品

合の坪古墳については、墳丘測量であるために一と二の要素に限られる。

まず、一、については、加茂川の流域に広がる平野を見下ろす位置にある、前方後方墳である。同様の立地を示す掛迫六号墳に比べると、平野の奥部に近いところになる。また、正福寺裏山一号墳と比べると、稜線の下ったところになる。

さらに、この古墳の最大の特色は、前方後方という墳形にある。もちろん、未測量の前方後円墳があれば、その中に前方後方墳が含まれている可能性はあるが、周辺地域に現状でも前方後円墳がほとんど確認されていないことから、芦田川流域においても特色ある古墳という評価ができればよい。

二、については、調査では、葺石や埴輪は確認できなかったが、古くには確認されたという。

地域的に考えると、背後の山塊は北には(Ⅲ)の小地域につながってゆき、南に目を転じれば掛迫古墳群を含む前期古墳の築造が認められる小地域につながる。また、加茂川をはさんでは、東に石槌山古墳群が互に見える位置にあり、時代をつうじて安定した古墳の築造を認めてよい。このことから、のちに(Ⅲ)・(Ⅳ)の小地域につながってゆく基盤となる地域であるとの見通しを得た。

墳丘測量という限られた調査ながら、私たちは、この古墳をつうじて下加茂の平野を中心とする小地域の解明が、芦田川流域の動向の解明に大きな意味のあるものであると考えた。

したがって、今後は小地域ごとの細かい分析を進めてゆかねばならない。そして、個々の特色と相互の関係の叙述を課題として、検討を進めるものである。